

校長室から応援メッセージ(5)

令和7年10月9日(木)

「振り返ると一本の道が…」

皆さん、こんにちは。10月に入り、さすがに涼しくなってきました。今朝、我が家の庭のキンモクセイが匂いでした。正確には匂っていることに気付いた、ということです。キンモクセイの匂いで私の意識は自分が予備校に通っていた1978年に向かいます。その年流行った堀内孝雄さんの『君のひとみは10000ボルト』という歌の中に、キンモクセイの咲く道が印象的に登場するからです。

予備校時代で思い出すのは、合格発表の掲示板の前で一人ニタニタしている場面ではなく、電車で揺られ、駅からトボトボ予備校に向かい、演習問題に取り組む姿です。何かの区切りとなる出来事より、日常的にささやかに繰り返される営みの方が記憶に蘇り、生きる支えになっているのではないかと感じています。

今度は高校時代です。3年間クラスが同じ友達がいました。理数科とかの特別のクラスではなく、普通科10クラスのクラス替えて、たまたまです。彼と私は、これもたまたまで、同じ大学・学部を受験し、彼は合格、私は不合格でした。私は予備校に通い、翌年入学しましたが、彼は大学で一年留年し、卒業は一緒でした。仲良しでしたが、待っていてくれたというわけではありません。

こんな話で、人生の時間は一時的に遅れてもきっと取り戻せる、と言いたいのではありません。私の浪人も、彼の留年も、私なりに彼なりにその時その時を真剣に生きた中でたまたま経験したことです。大学の入学や卒業がストレートでなかったことの位置づけは、彼も私もその後の人生が決めていくことなのでしょう。

皆さんの人生にはこの先、たくさんの分かれ道があります。どの大学に願書を出そうか…、どのような職業・会社を選ぼうか…、たくさんの分かれ道があります。その都度、一生懸命考えていずれかの道を選ぶのですが、どの道を選ぶ人生も、あとから振り返ればそれは一本の真っすぐな道になっていると思います。

予備校で回り道をした、ではなく、一本の真っすぐな道なのです。友達が先を行き私はあとから、ではなく、みなそれぞれ自分の道を歩んでいるのです。違う道を選択していたら…と、人生を後悔する気持ちも含みつつ誰もが思うのですが、振り返って目に映る一本の道に比べたら些細なことではないかと思えます。

人生を生きる、ということにおいて、人からの評価も、自分で自分に下す評価もほどほどにしたいものです。私はこの応援メッセージがうまく伝わったかどうかの評価はさておき、うまく伝わるための努力をし続けます。皆さんの勉強も、評価に振り回されず、最後まで自分を信じて頑張してほしいと心から願っています。